

フィールド
レポーターだより!!



藤樹橋 高島市

2017年度 第2回調査

「橋の名前を調べましょう」調査報告

2017年12月から2018年4月にかけて行われた「橋の名前の調査」結果がまとまりました。私たちの身近に多数ある地域の橋について、全県で調査されており、大変興味深く読ませていただきました。今回の調査のように、分布や名称などを考察された調査はとても珍しいと思います。

私は土木系の技術職員として、今まで橋について「道路施設」としての見方しかしていなかったため、橋をテーマに調査をすると聞いた際には、何か分かることがあるのだろうかと少し不安もありました。しかし、橋に取り付けられた銘板に着目し、地道なフィールド調査から、様々なことを丁寧に整理して明らかにするプロセスを見て、とても感心し驚きました。また、調査の過程で相談を受けたり、勉強会で皆さんと話をしたりする中でも、いろいろな発見がありました。

今回の調査で特に興味深かったのが、橋名の由来の分類です。橋の名前から分かる地域の歴史や、地域の方々の願いなどが垣間見えて、橋と地域とのつながりを感じる事が出来ました。また、現在の地図からは消えてしまった旧地名が橋名として残っているというのも、半永久的に残る構造物である橋ならではの事だと思いました。

銘板に記録する情報は、橋の管理者にとって重要であることは言うまでもありませんが、地域にとっても重要な情報が記されているものだと思います。今後街を歩く際、また、地図を見る際にも少し意識してみると面白いかもしれません。

最後に、銘板を「取り付け側の人間」の意見になるのですが、数多くの苦難を乗り越えて工事が完成し、取り付けられた銘板を見るのはとても感慨深いものです。また、橋の諸元を記した橋歴板という銘板に、設計や工事に携わった人たちの名前を記すこともあります(琵琶湖博物館の樹冠トレイル展望デッキにもこうした銘板を設置しているので、是非探してみてください)。今回の調査をきっかけに、多くの方々の力で造られ、地域の発展に貢献する橋というものに興味を持っていただければ幸いです。

(担当学芸職員 北井 剛)

「橋の名前を調べましょう」調査報告

フィールドレポーター・スタッフ

今回の調査を行うきっかけは、フィールドレポーター掲示板に寄せられた 1 通の手紙でした。その手紙には、「橋の起点側が平仮名、外界側が漢字で表記されており、幼少時に故郷を離れて、世間での苦労を重ねて読み書きを覚えて帰って来る時には漢字が読める(原文を抜粋)」と書いてあったのでした。日常でも橋の名前を調べることはあるかもしれませんが、橋の名前が平仮名なのか、漢字なのかについて、気に留めている人は少ないのではないのでしょうか。そこで今回の調査は、橋の名前の由来や、橋銘板(きょうめいばん)に記載してあることについて、様々な角度から調べてみることにしました。橋銘板とは、橋の名前だけでなく、川の名前や竣工年月日など、橋に関わる情報が記されたものです。調査票を作成する時には、橋銘板に書いてある内容をどのように記録してもらうかを考えました。また、橋の名前の由来については、近隣の資料館などで調べることができるのかを検討しました。



大津市大宮川 大宮川橋
昭和拾年参月竣功

今回の調査は、植物や虫のように見つけるのが大変というものではありませんでした。しかし、手紙に書いてあったことについて考えるには、道路管理者について知る必要がありました。今回調べようと考えている橋は、道路の一部です。そのため、国道や県道、市町の道路によって管理者が異なります(正確には、橋の設置者と道路橋の管理者は異なる場合もあります。本調査では、橋のかけられた道路をデータとしているので、便宜上道路管理者と書きます)。橋銘板に表示する情報や位置は、管理者によって違いはあるのか? それを知るには、何を基準にして方向を統一的に見たらよいのか? スタッフは試行錯誤しながら、手探りで調査票を作成しました。そのため、調査をしてくださったレポーターの皆さまの中には、今回の調査票はいつもと勝手が違うように思われた方がいるかもしれません。そのため、調査期間中に「橋の名前調査」に関する勉強会を行い、少しでもこの調査について興味を持ってもらえるように工夫をしました。この勉強会を通じて、本調査の担当学芸職員である北井さんから、橋の名前(平仮名・漢字)や河川名について、道路の起点からどの位置につけるか、国・県・市町といった管理者の違いによって、名前のつけ方に何か特徴があるかもしれないという指摘がありました。今回の調査報告は、勉強会で学んだ知識を活かし、結果をまとめる過程で、少しずつ橋の名前や橋銘板の特徴について発見したことをまとめたものです。

今回の橋の名前調査では、道に沿って橋を調査したレポーター、川に沿って橋を調査したレポーター、あるいはその両方を行ってくれたレポーターもいました。さらに、地域の方に話を聞いたり、資料から橋の名の由来を探してくれたレポーターもいました。それらの結果は、橋の分布図にしっかりと刻まれています。橋の名前の由来を調べるために、何度も調査に出かけてくださった皆さま、広範囲にわたり車を走らせて、調査に参加してくださった皆さま、本当にありがとうございました。

この調査から、道路管理者によって橋の名前に特徴がみられることや、橋の名前について、漢字であるか平仮名であるかというのは、道路の起点・終点との関連が強いことがわかりました。また、橋の名前を調べていく過程で、地域の歴史について知ることができたレポーターや、橋の見方が変わったというレポーターもおられるようです。それらを踏まえて、調査結果をご報告します。

I 調査の目的と方法

滋賀県にかかる橋は、国や市町等によって管理者が異なるため、県内の橋の名前について統一的に知ることのできる資料はありません。また、県内の橋銘板にはどのようなことが記載されているかについて、調べた資料もありませんでした。そこで本調査では、フィールドワークを通じて橋の名前や、橋銘板(きょうめいばん)に記す内容について何か特徴があるかを発見することを目的としました。

まず、フィールドレポーター・スタッフが調査票および調査資料を作成し、それを県内各地のレポーターに郵送しました。また、ホームページにそれらを公開し、レポーターがいつでも調査票を印刷できるようにしました。本調査では、河川にかかる橋について調べることにしましたが、鉄道・水道橋等については対象から除きました。調査票には、橋の名前に関する質問だけでなく、橋の周辺の環境についても記入してもらうことで、橋の正確な位置をつかむ工夫をしました。レポーターは、任意の場所で調査を行って調査票に記録した後、それを博物館に返送しました。調査期間は2017年12月1日～2018年4月10日としました。調査項目は1.地点の位置 2.橋の名前 3.橋の名前の由来や名前の分かった理由 4.周辺環境 5.橋名板(橋銘板)に書かれている内容の他、自由記述欄を設けました。そして、橋につけられた名前の由来を知ることによって、地域についてより関心を持ってもらうきっかけとなればと思い、この調査を始めました。

II 調査の結果とまとめ

本調査では17名のレポーターから569件の調査票が寄せられました。その中には、複数の調査者が偶然にも同一地点を調べた報告がありました。重複した地点の報告は、橋の位置や竣工年月など、フィールドレポーター・スタッフで確認できるものについては1つにまとめました。そのため、橋について調査結果は最終的には計542件となりました。また、橋の名前を確認できたものは447件(全体の82.5%)でした。今回は橋の名前に着目した調査だったため、無名橋について報告が少なかったのかもしれない。

1. 橋の分布 — 市町や設置者による橋の分布の違い —

報告を受けた542件を地図上に記しました(図1-1)。この図からは、大津市や高島市に多くの橋があることが明らかになりました。特に、大津市の南湖南端では橋を示す地点が多く、地図が点で埋まってしまいました。一方日野町・湖南市のように、地点データのない地域もありました。これは、その地域で調査をしたレポーターがいなかったのだと思います。ただ、道路(橋)が少ない地域もあることは考慮する必要がありそうです。橋の地点を目で追うと、道路をたどって調べた橋だろうと推測できる場所があります。例えば、国道161号等(旧国道161号を含む)です。同様

に、川をたどって調べた橋についても推測することができます。例えば、姉川や安曇川等です。これらは、調査票の案内で記した「河川を中心に河口などの基点から上流までを歩いて調べたり、あるいは、一本の道路をたどって橋を順番に調べることも面白いと思います」に対して、レポーターの皆さんが真摯に調査票を届けてくださった結果です。ここまできれいに地図上に反映されるのを見ると、橋は道路の一部であり、また、川を渡るものであることが実感できます。他にも、この橋の分布図から読者各々の視点で、何か発見することができるのではないのでしょうか。もし、何か面白い発見があれば、フィールドレポーター・スタッフのアドレス (freporter@biwahaku.jp) まで連絡を下さい。

次に、報告のあった橋の数を市町別にまとめたものが図 1-2 です。市町をまたぐ橋については、調査票の回答を基に集計しました。本調査結果を市町別に比較する際には、河川の分布やレポーターが調査した地点の偏り、橋の数や道路の数といった様々なことを考慮する必要があります。そのため、本報告では市町別の橋数については、考察を控えました。

図1-1 調査された 全ての橋の分布図

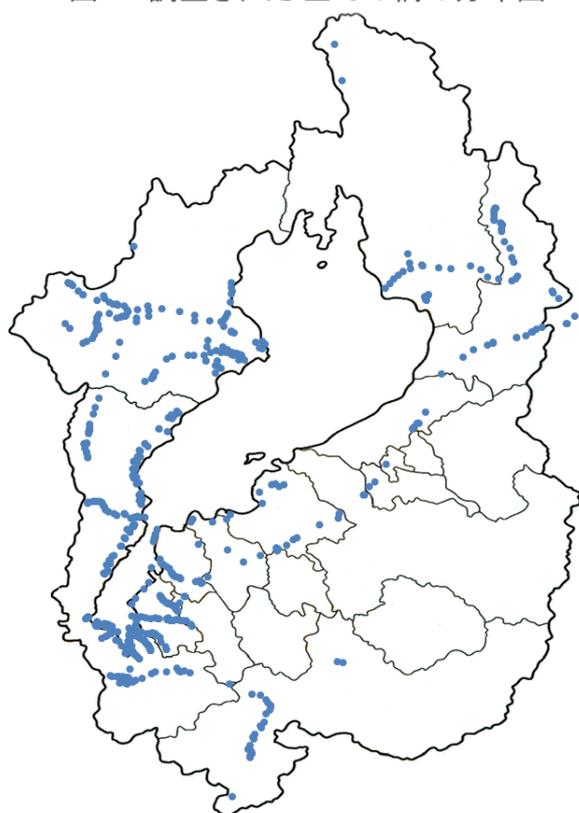
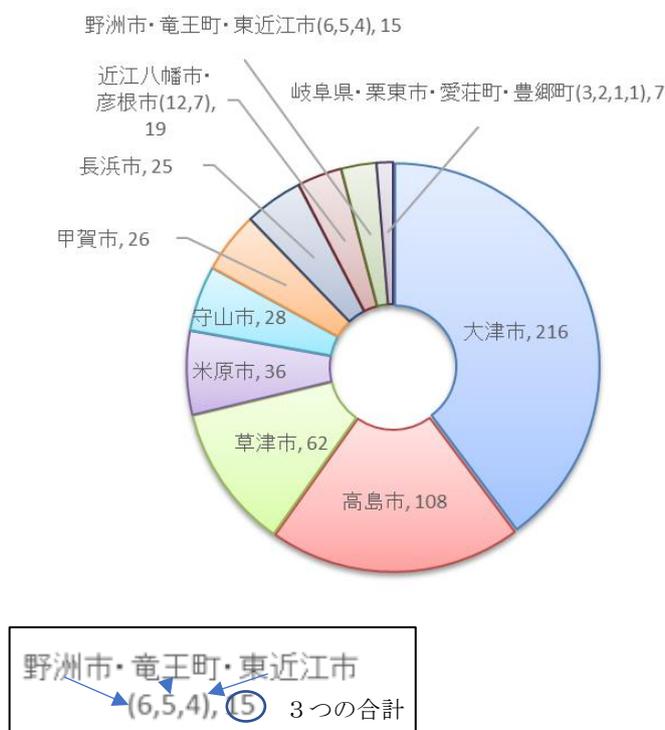


図1-2 調査された市町別の橋の数



◇道路橋管理者別で分布に特徴はあるのか？

橋を管理する部局に着目して、国道・県道・市道等別に分けた橋の分布を図に記しました(図 1-3~5)。今回の調査項目には、道路橋の管理者という項目はありませんでした。そのため、スタッフが調査結果を基に、道路管理者を調べたものを土台としています。国道のように管理者がすぐに分かるものは良いのですが、橋のかけられた道路名が分からないところもありました。そうしたところを中心に丹念に調べましたが、全てが分かるわけではありませんでした。そのため図 1-3~5 では、橋の名前が分かり、かつ、道路橋の管理者が分かる 445 橋(会社の通用橋や家に入るためにかけた私的な橋は除く)を基に分布図を作成しました。

国道にかかる橋の分布図(図 1-3)を見ると、湖西のデータが多く集まりました。特に大津市内の国道 161 号(旧 161 号を含む)については、橋の数が多いことがこの分布図からも読み取れます。これは比良山系から流れ出る川が多いことともあるとは思いますが、調査結果が密に集まった地域であることを示しています。

図1-3 国道にかかる橋の分布図

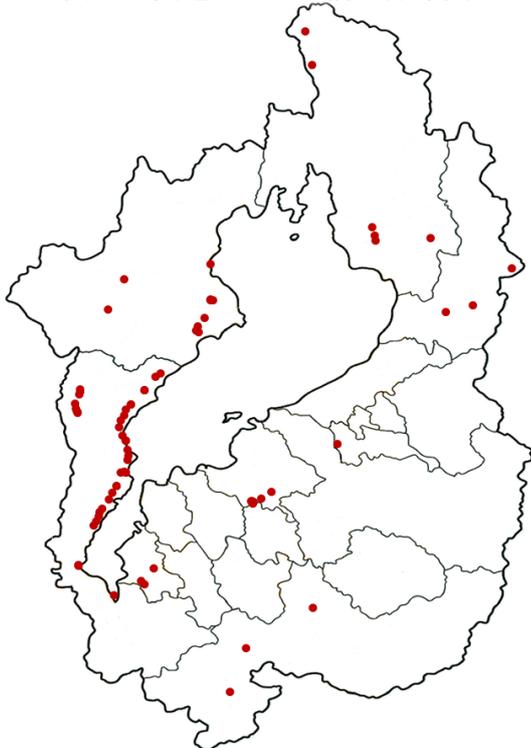


図1-4 県道にかかる橋の分布図

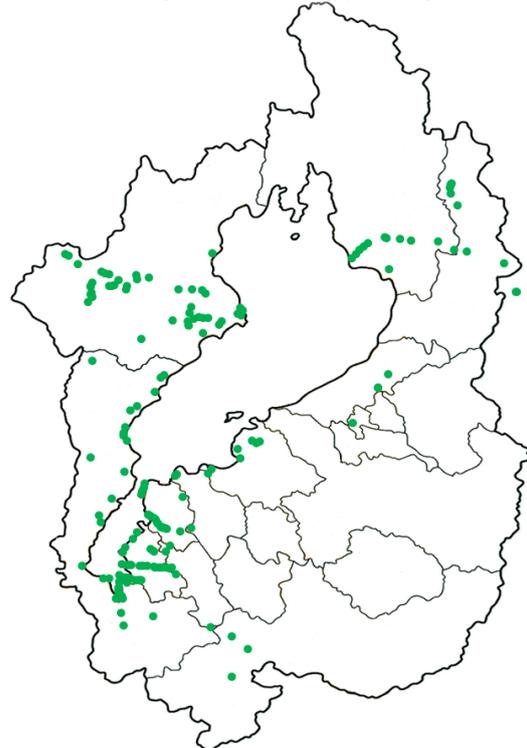
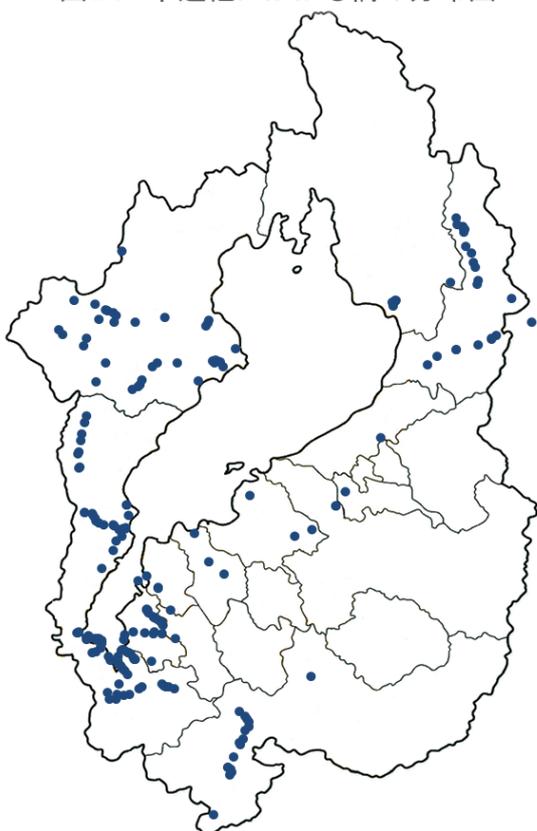


図1-5 市道他にかかる橋の分布図



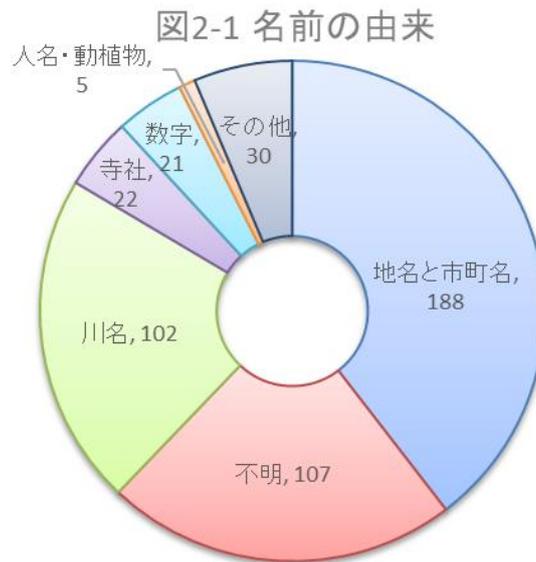
県道にかかる橋の分布図(図 1-4)では、県道が南湖東側の橋の密集している点線があります。よく見ると、草津市の草津川や狼川にかかる橋であることが分かります。また、湖岸沿いの道路にかかる橋が多いのも、この分布図の特徴です。

市道他にかかる橋の分布図(図 1-5)では、県道と同様に大津市と高島市に橋の地点数は多いですが、大津市の真野川や甲賀市の大戸川にかかる橋の分布が明確に分かります。ただ、これらは複数の道路にかかる橋を示したものであるため、国道のように何号線と具体的に示すのが難しいです。

姉川にかかる橋は上流では市道等が多く、下流では県道が多いことが分かります。それらを統合した図 1-1 を見ると、橋の地点を記したものが川の流れのように見えます。一度図 1-1 を見てから、図 1-3~5 を見ると、道路管理者と橋の関係について何か発見があるかもしれません。

2. 橋の名前の由来について

まずは上記の 445 橋から回収した回答数 475 件(名前の由来にて:複数回答可、不明も含める)を基に結果をまとめた(図 2-1)。調査票では「地名」と「市町名」を分けましたが、本報告では、これらをまとめて集計しました。この結果、不明は 107 件と全回答数の 22.5%あるものの、地名と市町名を合わせたものが一番多くなりました(188 件、全回答数の 39.6%)。また、河川名もこれらの次に多く、地名と市町名と河川名を合わせると、290 件で全回答数の約 61.1%を占めました。地名や河川名と言っても、その由来は様々です。自由記述の中から、いくつか特徴的なものを挙げます。



中道橋(なかみちはし): 橋の野田側の小字の「中島」と鴨側の小字の「山道」から一文字ずつ取って「中道」とつけられたと思われる。

両台橋(りょうたいばし): 橋の両側の小字がともに「台」であることから、「両台」という橋名となったと聞いている。

常安橋(じょうあんばし)については、二人のレポーターが同じ橋についてレポートしてくれています。

常安橋: 高島市の「広報たかしま」平成 17 年 12 月号によれば、河の兩岸の地名(安曇川町の常盤木と新旭町の安井川)の頭文字をとって常安橋と名づけられたという。

常安橋: 橋の両側の「常盤木」と「安井川」の集落名の頭文字をとって、「常安橋」と名前がついた。橋名の読みが、地元で呼ばれている「じょうあんばし」と異なっている。昭和 33 年 3 月竣工は、調査した中で、高島市内最古(現在、新橋建設中)。

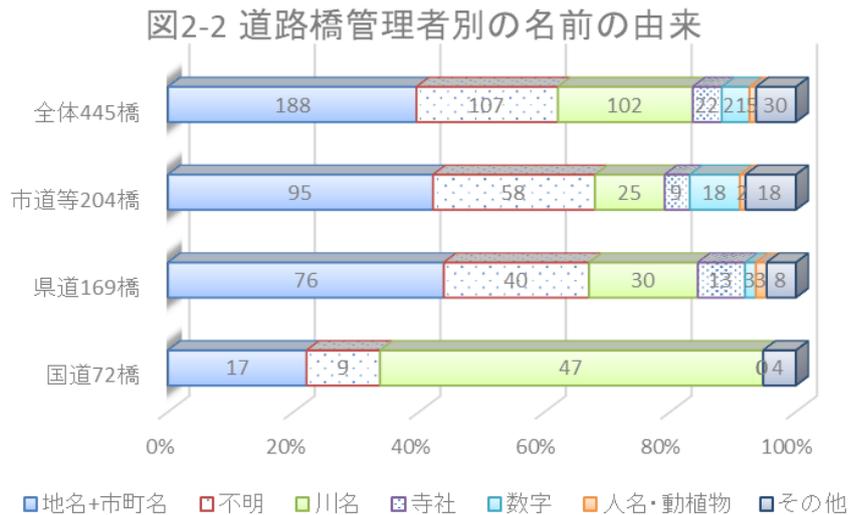
このように、2つの地域の名前を合わせて橋の名前にしたという記述がありました。これらは全て高島市であったことも興味深いことです。また、資料より橋の名前の由来について深く探索している記述や、地元の歴史についての記述もありました。

三操橋(みくりはし): 三操岩は地名となっているが、安曇川の中にあつた大岩による。地券取調総絵図(明治 6 年)の荒川村の絵図によると「三操岩」は小字名。

馬渡橋(もうたりばし)：橋の名前ではなく我が村、馬渡の由来です。馬(渡)は、古云は大観音寺とい
い、北国街道の要路でありながら橋がなく渡し船を使っていました。足利尊氏が恵源と戦った
時、折からの洪水で軍馬を渡すことができず難渋しましたが村の人々挙って出動しこれを助け
ました。この功績により、馬渡しと改めよと尊氏公から賜った地名です。

その他の由来については、道路の管理者別の名前の由来で見いきます(図 2-2)。

◇道路管理者別に名前の由来を分類すると、何か特徴はあるのか？



道路管理者別の名前の由来についてグラフにすると(図 2-2)、国道とその他では、名前の由来に異なる傾向がありました。国・県・市町道では、それぞれ道路の役割が異なります(幹線道～生活道)。そのため、自ずと橋の名称にスケール感などの特徴が出てくると考えられます。例えば、国道にかかった橋の名前に着目すると、河川名に由来するものが全体の 65.3%と、県道や市道等とは大きく異なりました。一方県道や市道等では、地名と市町名を合わせたものが、一番多かったです(県道 50.0%、市道等 46.6%)。県道では、次に多かったのは河川名でした(15.8%)。これは全体の橋と同じ傾向でしたが、市道等では国道・県道と比べると、名前の由来に「数字」があるものが多いことが判明しました。実際に全ての橋梁数を調査したわけではありませんが、数字に由来する橋が市道等に多いというのは、自分の住んでいる周辺の河川名を調べた方であれば、「なるほど」と思う人と「とても意外である」と思う人に分かれるのではないのでしょうか。本調査結果において、数字に由来する橋名として、「にほの浜 1 号橋」や「宮城 1 号橋」等が記録されました。それらのほとんどは、大津市内において局所的に分布していました。そのため、数字の橋を知っている人とそうでない人がいてもおかしくないのではと私たちは推測しています。これまでに、道路管理者別に名前の由来を分類した調査はありませんでした。そうした点で、本調査はこれまでとは異なる観点で、新しい発見ができたのではないのでしょうか。名の由来が不明の割合は、国道-県道-市道等とスケールが小さくなるにつれて、多くなることが示されました(国道 12.5%、県道 23.6%、市道等 28.4%)。橋の調査では、地元の橋だけを調査している訳ではありません。そのため、川の名前や住所等のように見当がつきやすいものについては由来が分かりますが、旧住所などになると、地元の人しか分からない橋もあるでしょう。そのようなことも、この結果に反映しているのかもしれませんが。

寺社由来の名前については、それほど多くないものの、県道・市道等でつけられていることが明らかになりました。これも地域に密着した名の由来と考えられます。また、人名・動物名については、予想していた通り、多くはありませんでした(橋全体の 0.01%)。人名としては、藤樹橋や地良々橋のように歴史上の人物に由来する名前もありましたが、地主の名前のついた橋というものもありました。また、動物に由来するものは「蛭千橋」の 1 例でした。自由記述には、

千丈川にかかる橋の中で唯一小学生たちが名づけた橋です。平成 16 年、千丈川にかかる橋の名前を調べた所、公民館の裏の橋に名前がないことがわかり、自治会を通して名前をつけさせて頂きました。いろいろな名前が出てきましたが、結果「蛭がいっぱい千匹も飛んでほしい！(そして地名が千町ということもあり)」という願いをこめて蛭千橋(けいせんばし)と名づけました。今では人々にとても親しまれています。

と書いてありました。

名前の由来には様々な物語があるだろうとは想像してはいましたが、レポーターの皆さまが自由記述を書いてくれたおかげで、地域の方々の思いも調査報告に載せることができました。

◇名前の由来と地域性について

さて、こうした名前の由来の違いは何に起因するのでしょうか。橋の名前のつけ方については、国土交通省中国地方整備局のQ&A(<https://www.cgr.mlit.go.jp/iken/qa/okotae/000808.htm>)には、次のように記しています。(1) 橋をかける場所の地名や近くの代表的な地名、地域のシンボルとなるような橋名をつける。(2) 橋のかかっている川の名前を付ける。(3) 橋を設計するときに決めた名前を橋名にそのまま使う。国道にかけられた橋に河川名が多いのは、こうしたものにそれなりに準拠しているのでしょうか。一方、県道や市道等は、地域にかかる橋です。そのため、橋をかける地区の地名が多いのでしょうか。実際に、川を隔てて地名が変わるところも多いです。地名は、市町村合併等で名前が変わることがあります、そう考えると、橋にはどの時点の地名が名づけられているのでしょうか。地名について自由記述を読むと、「旧住所」というものが 29 件みられました。これは地名について書かれた自由記述 69 件の中で 42%を占めました。旧住所については、自由記述に記載されていない限り、今回は集計しませんでした。実際にはもっと多いのかもしれませんが。これはとても興味深いものでした。これまで日本では市町村合併を繰り返し、行政区が大きくなってきました。その結果、昔からの地名がどんどん消えていってしまったととらえることもできます。一方、橋は、一度かけたら名前が変わることは少ないので、その地域の歴史を色濃く残すものとしてとらえなおすことができるかもしれません。

調査回答の「その他」の中には、景勝地名(雄松橋)、橋の規模(安曇川小橋)、新旧(新和迹川橋)、地域のシンボル(藤ノ木一号橋)など、調査項目としては挙げていなかったものが並びました。「その他」という回答は 59 件と全体の 13.3%でした。名前の由来についての自由記述をみると、人々の生活に密着したものから、橋の位置が分かれば良い程度のもので、多種多様であることが再認識されました。また、橋の名前の由来ではありませんが、同じ河川内で同じ名前の橋が 2 カ所以上見つかったところが 13 カ所ありました(例:狼川橋、大戸川橋等)。その多くは川の名前でした。このような発見も、レポーターの皆さまから頂いたデータの賜物です。

さて、今回の調査では、自由記述が 147 件もありました。その中には、地域の方から橋の名前の由来を聞いてくれた方や、資料館などへ調べに行った方もいます。紙面の関係上、全て紹介することができませんが、その中のいくつかを紹介します。

新堀橋(しんぼりばし)：音羽山から東に向かって流れ降り元々は現在の膳所公園付近に注いでいたが、膳所城築城に当たり現在京阪電車「膳所本町」の付近から一気に北側に迂回させ膳所城の外堀としての機能を持たせたという。地域の古老は相模川といわず「新堀」という人が多い。橋名板が無く、かなり長くこの地に棲んでいる人でも「新堀橋」と答えられる人は少なくなった。

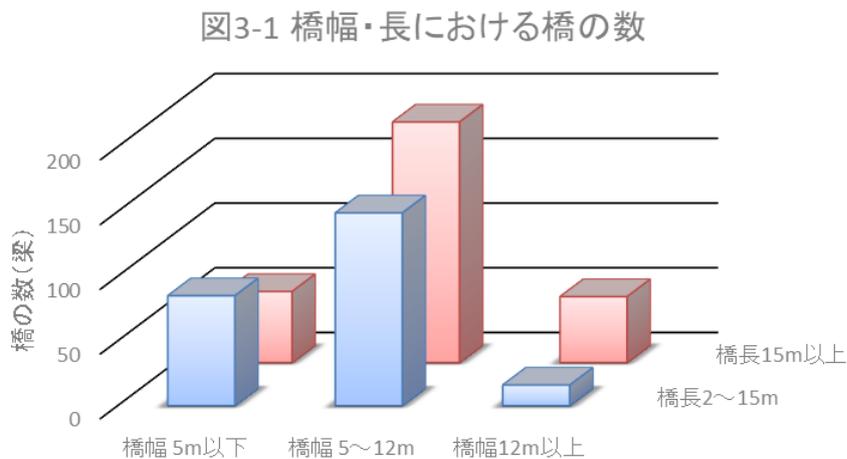
雄松橋(おまつはし)：琵琶湖八景で“雄松崎の白汀”といわれる場所。近くに雄松崎と呼ばれる岬があり、それに由来すると思われる。

新宿橋(しんしゅくはし)：この場所に、かつて北国海道の宿があり、宿の前にあった橋(石橋)は「宿の橋」と呼ばれていた。1948年に県によって真野川が改修され、その時に“新しい宿の橋”ができたので、「新宿橋」と名づけたという。なお、橋名は“しんしゅく”と発音され、地元の人もみな、清音で呼んでいる。

こうした記述を読ませてもらうと、この調査の目的である「橋の名前の由来を知ること、地域についてより関心を持ってもらうきっかけとなる」ということは達成できたのではないかと思います。

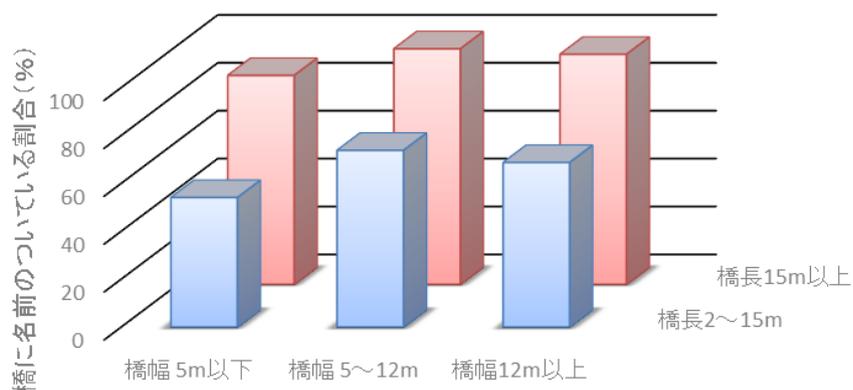
3. 橋の規模と橋の名前の有無

さて、橋を構造物としてとらえた時に、橋の大きさと橋の名前については、何か関係があるのでしょうか。本調査では、残念ながら明確な結果は出ませんでした。調査票では、橋の長さや幅については目測ではありますが、多くのレポーターが記入しました。橋の長さや幅について分かった 542 件をまとめました。橋幅は橋長に関係なく、5-12m のものが多かったです(図 3-1)。道路橋であることを考えれば、5-12m というのは 1~2 車線程度です。そのため、この幅が多くみられたのだと考えられます。また、橋幅が 5m 以下の橋に注目すると、橋長は 15m 以下のものの方が多く(15m 以下 85 橋、15m 以上 55 橋)、橋幅が 12m 以上になると、橋長が 15m 以上のものが多くなりました(15m 以下 16 橋、15m 以上 51 橋)。



また、橋の幅・長さのデータと橋の名前の有無についてまとめたものが図 3-2 です。橋の長さに注目すると、15m 以上ではほとんどの橋に名前がついていることが分かりました(橋幅 5m 以下 87.3%、5~12m 98.4%、12m 以上 96.1%)。一方、橋の幅の大小によって橋の名前のつく割合が多くなったとは言えませんでした。この調査では、構造物については詳しいことを調べていません。そのため、これ以上の報告はできないことをご了承下さい。

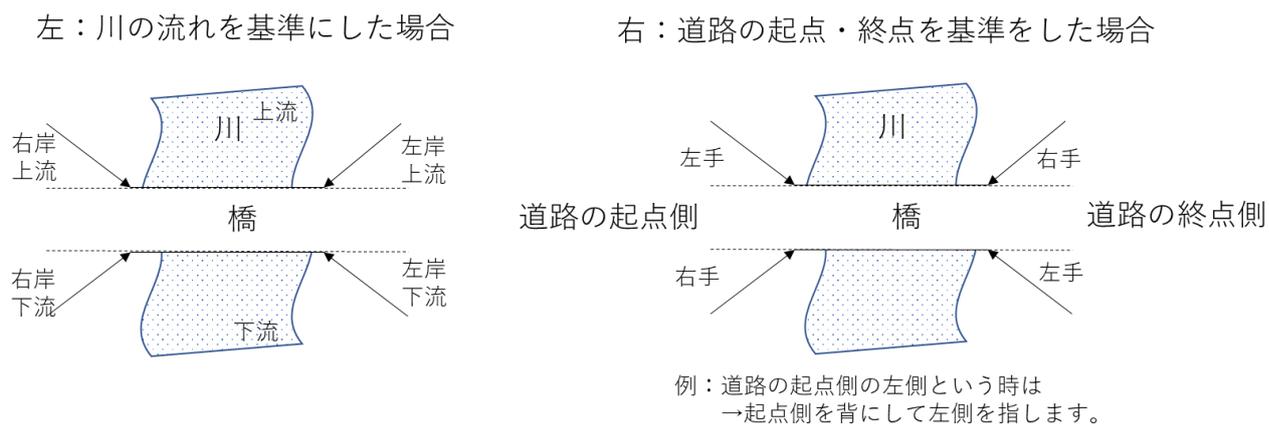
図3-2 橋幅・長における橋の名前の割合



4. 橋銘板に記されていた文字:橋の名前(漢字)・橋の名前(かな)・河川名・竣工年月

橋銘板に記されていた表記名には、橋の名前(漢字)・橋の名前(かな)・河川名・竣工年月があります。この調査で私たちが最も難しいと考えていたのは、橋銘板に記された表記名の位置を特定することでした(図 4-1)。橋銘板は四カ所あるのですが、それらについて、二つのパターンで示しました。橋銘板の表示の詳細については、16 ページの Appendix 2 をご覧ください。

図4-1 橋名板のある四カ所の表記位置



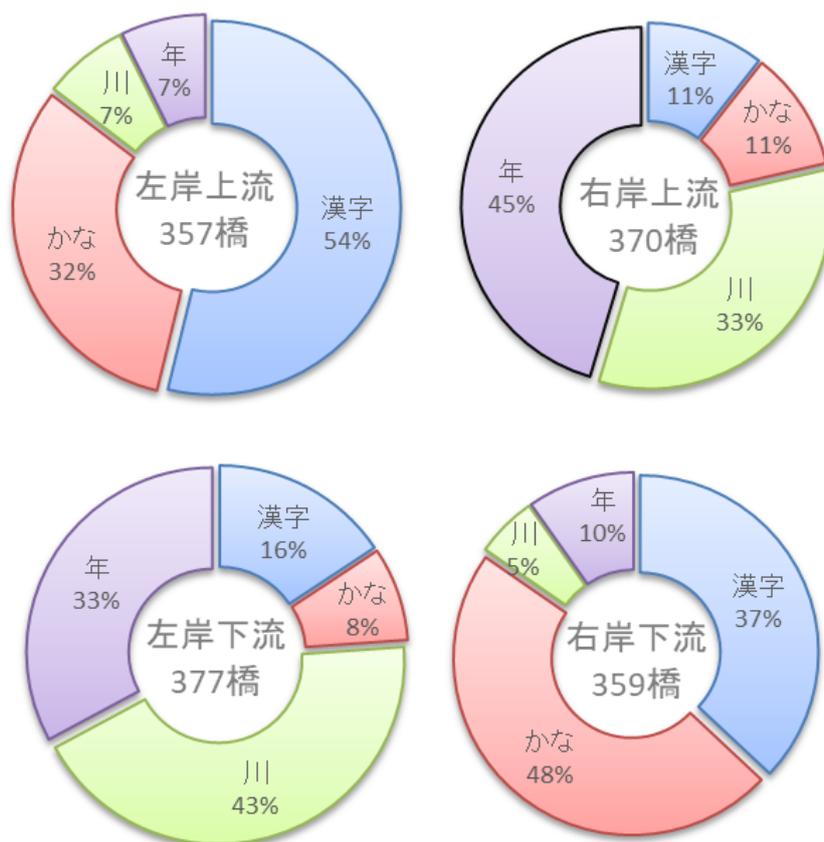
調査票を作成していた当初は、川の流れを基準にすることで、文字の種類を統一的に集計できると考えていました(図 4-1 左)。しかし、橋の名前調査の勉強会で北井学芸職員の話を知ったことで、「道路の起点・終点」という新しい着眼点が生まれてきました(図 4-1 右)。もちろん、道路や橋の建造に携わっている方であれば、すぐに思いつくことなのかもしれませんが、そうしたことを知らない私たちには、このアイデアがとても斬新に思えました。

川の流れを基準にした場合(図 4-2)と、道路の起点・終点を基準にした場合(図 4-3)です。図 4-2 は、橋銘板のあった 403 橋を対象としました。中には、橋の二カ所に同じ表記のものもありました。このように重複したものも集計に加えています。また、四カ所の橋銘板が全てそろっていても、内容が分かるものは集計に含めています。一方、図 4-3 は、道路の起点・終点について分かった橋のみを集計しています。そのため、287 橋が対象となっています。そこで、調査票を回収した後に橋のかかった道路の起点・終点について調べ、わかる範囲で調査票のデータと組み合わせました。

◇「橋の名前は道路の起点側が平仮名、終点側は漢字である」のか？

まず図 4-2 ですが、左岸上流と右岸下流では、「漢字・かな」の割合が 85%を越えました。同様に、右岸上流と左岸下流では、「川・年」の割合が 75%を超えました。この結果から、対角線上には記される文字の種類が非常に似ているということが言えます。

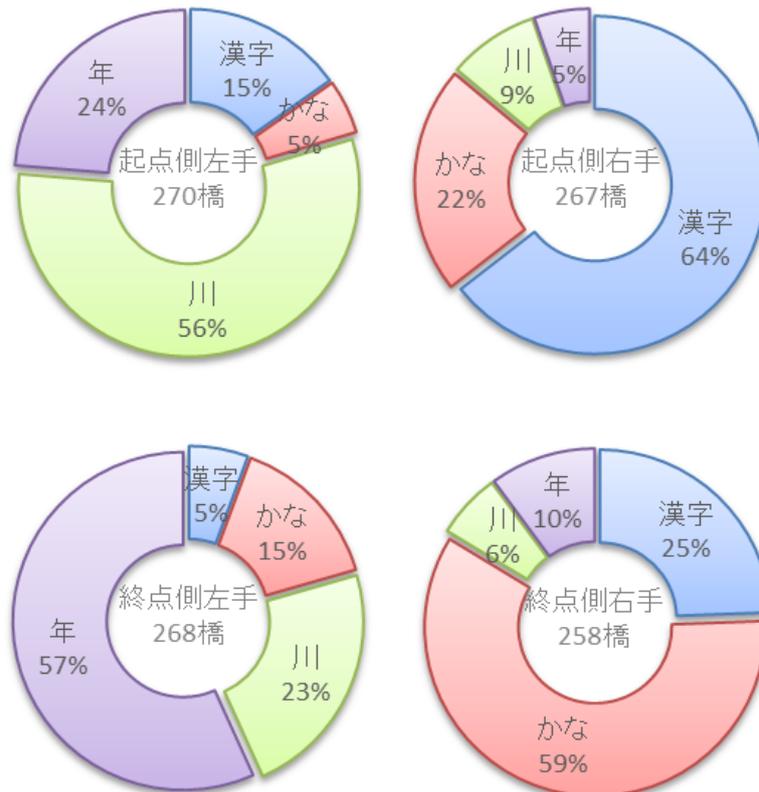
図4-2 橋銘板に記された表記名
(川の流れを基準にした場合)



「漢字」は橋の名前が漢字であることを指します。「かな」は橋の名前がかなであることを指します。「川」は河川名を指します。平仮名で書かれた河川も「川」に属します。「年」は竣工年を指します。

一方、道路の起点・終点を基準にした場合、起点側を背にして橋の左右、終点側を背にして橋の左右で漢字・かな・川・年のどれかが50%を超えることが明らかとなりました(図4-3)。このように、道路の起点・終点という基準でまとめると、川の流れを基準にした場合よりも、「漢字・かな・川・年」といった表記名が多数を占める橋銘板が明確になったことが分かりました。

図4-3 橋銘板に記された表記名
(道路の起点・終点を基準にした場合)



「漢字」は橋の名前が漢字であることを指します。「かな」は橋の名前がかなであることを指します。「川」は河川名を指します。平仮名で書かれた河川も「川」に属します。「年」は竣工年を指します。

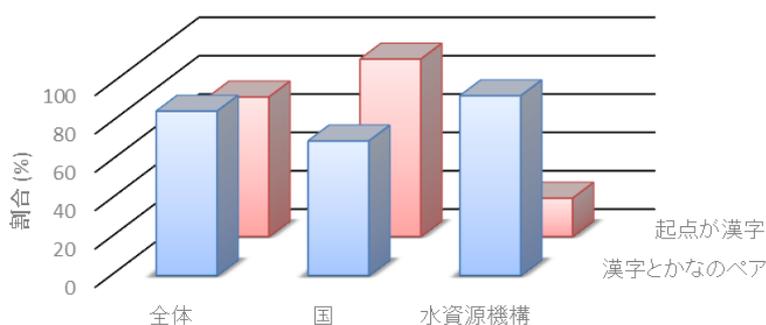
このように橋銘板に記された文字の種類に明確なパターンがあるということは、これらの取り付け位置について、何かルールがあるのでしょうか。例えば、愛知県道路建設課の橋梁設計の手引き第6章には、橋銘板の取り付け位置について明確な説明があります。www.pref.aichi.jp/dourokensetsu/kyouryoutebiki/file/270401/270401-6.pdf。道路の起点右手は河川名、左手は漢字橋名、道路の終点右手は竣工年月、左手はひらがな橋名です。滋賀県ではこうしたルールを定めた資料は見つかりませんでした。

さて、はじめの問いに戻りますと、道路の起点側に平仮名が表記されている時もあるし、漢字の時もあるというのが、現時点での結論です。この調査では、道路の終点側が「かな」で記されている橋数が圧倒的に多いことが分かりました。この調査を通じて、また一つ発見がありました。

◇ 橋銘板の表記をペアで考えると見えてくる滋賀県の特徴

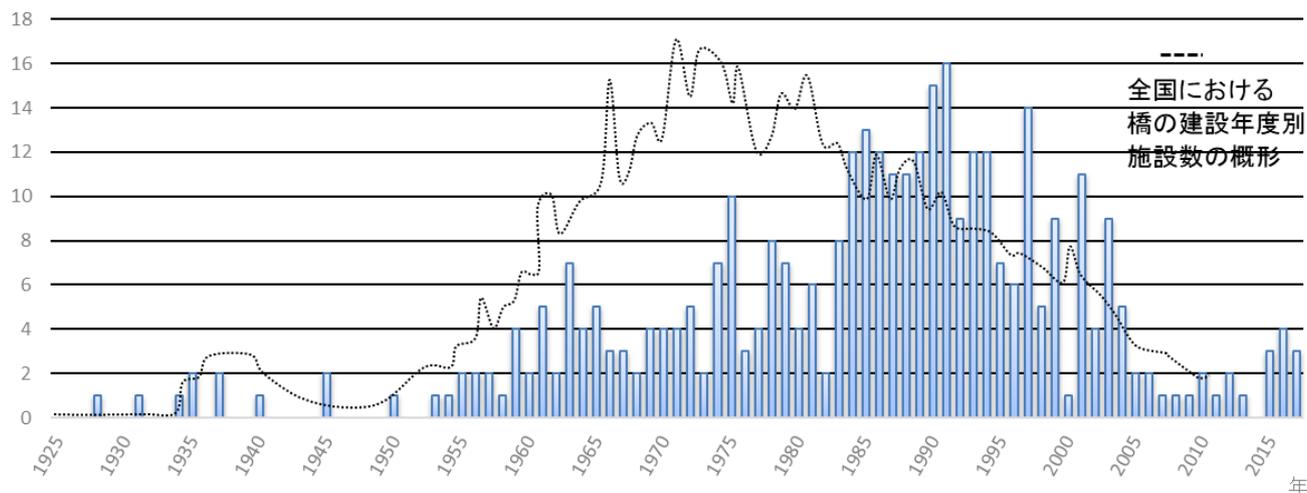
この調査では、滋賀県内にいながら、国道と県道・市道等、道路管理者による橋銘板の取り付け位置の違いを比較することができました。例えば、「漢字」と「かな」のペアについて注目したものが図 4-4 です。これを見ると、全体 287 橋に対して、漢字とかなのペアの 85.8%は道路の起点・終点でペアになっていることが明らかとなりました(起点のみに漢字とかなのペアがあるようなことは少なかったです)。また、全体の傾向としては道路の起点側に漢字は配置されていることが多かったのですが、道路管理者の違いによって、異なる傾向がありました。例えば、今回調べた国道 57 橋では、起点・終点で漢字とかなのペアがある場合、道路の起点側が「漢字」である割合が圧倒的に高かったのですが(92.5%)、水資源開発公団が設置した橋 16 橋では、道路の起点側には「漢字」である割合が低かったです(20%)。全体としては、国と同じような傾向と言えるのですが、水資源開発公団が設置した橋については、滋賀県独自のものと言えるでしょう。

図4-4 起終点に対する漢字・かなペアの割合と
ペアの中で起点が漢字の場合の割合



5. 橋の竣工年比較 — 全国と比較して何かわかる? —

さて、これまでは滋賀県内の調査した橋についていろいろまとめてきましたが、今回の調査では、竣工年も情報として蓄積することができました。これを利用して、橋の作られてきた歴史について振り返り、全国と今回調査した結果を比較してみることにしました。図 5 は調査で取得した竣工年を棒グラフにしました。また、全国の橋の竣工年は概形として記しました。参考にしたのは、国土交通省が公開している「道路構造物の現状(橋梁)」です(www.mlit.go.jp/road/sisaku/yobohozen/yobo1_1.pdf)。この概形は 1925 年からの 2010 年について大まかに描いたものです。そのため、全国の橋数については、縦軸の目盛りはありません。つまり、左の縦軸は棒グラフ(今回の調査した橋数)の軸です。これを見ると、滋賀県は 1970 年代の高度経済成長の時には橋の竣工数は少ないですが、1980 年代後半になると、多くの橋が建設されていることが明らかになりました。これは琵琶湖総合開発の影響によるものだと考えています。もちろん、本調査は全ての橋を網羅している訳ではないため、今後この調査にデータを加えていくことで、もう少し説得力のあることが発見できそうです。このグラフを作成することで、地域別かつ、時代別に橋の竣工年でまとめてみると、橋が地域の発展にどのように関与しているかが見えてくるかもしれません。また、竣工年だけでは分からない橋のかけ替えについて調べてみると、地域の歴史について新しい発見があるかもしれません。



国土交通省ホームページ「道路構造物の現状(橋梁)」(www.mlit.go.jp/road/sisaku/yobohozen/yobo1_1.pdf)より、「全国における橋の建設年別施設数」を参考にして、概形に改変した。

おわりに

普段あまり気に留めないものを調査するのは面白いものです。今回の調査では、「橋の名前」に注目してみました。実のところは、「橋の名前にかたかなと漢字の表記があるが、その取り付ける位置には何かルールがあるのだろうか？」というのが、この調査の出発点でした。それをレポーターの皆さまに「橋の名前の由来」も含めて調査をしていただくことで、橋の名前の由来の多様性や、橋の名前から透けて見える地域の歴史、橋銘板の地域性等、新発見につながりました。また、レポーターが冬の寒い中、滋賀県内のデータをたくさん集めた結果、精密な橋の分布図を作成することができました。橋は道路の一部であり、管理者がその情報を持っています。滋賀県といえども、国道・県道・市道等、管理者の異なる橋について統一的に見ることのできる地図はそれほど多くないのではないのでしょうか。本調査結果は、行政の枠を越えた調査という点でも評価できるものではないかと思っています。

橋は多くの人にとって、日常生活にはなくてはならないものです。この調査結果を読み終わった後、橋を渡る際に橋の名前に少し気をつけてみてはどうでしょうか。橋の名前から地域のことについて、何か発見があるかもしれません。また、他県に行った時にも橋の名前を見ながら、この調査結果と比較してみると、何か面白いことが分かるかもしれません。

最後になりましたが、調査の計画段階から報告書作成まで終始、丁寧なご助言ご指導をいただきました琵琶湖博物館の北井剛学芸員にお礼を申し上げます。また、フィールドレポーター担当の大槻達郎学芸員には多岐にわたってお世話になりました。ありがとうございました。

2017年度 第2回フィールドレポーター調査

「橋の名前を調べましょう」のご案内

2017年12月

橋は、様々な役割を持っています。

人と車が安全に川などをまたいで進む交通のネットワークのポイントとなり、私たちの日々の生活の一部を担っています。また、橋は、まちのシンボルや目印になったり、構造とデザインを誇る建造物であったり、景観としての価値を高めます。さらに、橋からの眺めは私たちの感情移入の格好の対象にもなるため、歌や文芸作品のテーマにもたくさん登場しています。言い換えれば、橋は、歴史を刻み、未来を創るものとも言えるようです。

琵琶湖周辺には、数百本もの大小さまざまな河川が流れています。それらの河川には、当然大小さまざまな橋がかけられており、どれもが、地元の先人たちの願いや要望で造られ、利用されているものです。小さな川を琵琶湖畔から上流へと歩いてみますと、随分多くの橋がかけられていることに驚かされます。名前のある橋、無い橋、形も古さも様々あります。しかし、当たり前存在である身近な橋は、地域に密着しているにもかかわらず、あまり意識されていないのかもしれない。

そこで、今回のフィールドレポーター調査では、滋賀県の河川のどこに、どのような名前の橋があるのか、地域の河川にかかる橋について、橋の名を中心に自由な発想で調べていただきたいと考えています。河川を中心に河口などの基点から上流までを歩いて調べたり、あるいは、1本の道路に沿って、その道にかかる橋を順番に調べることも面白いと思います。橋の名前やそれぞれの特徴、由来など、調査票にある項目で調べて記録をしてください。この調査は、橋を意識するに従い、さらにさまざまな発見や出会いがあるのではないかと考えています。橋を見つけて、気が付いたこと、面白いと思ったことから、さらに、詳しい方に尋ねたり、図書館で古い地図と比較をしたり、興味を広げて調べていただければと思います。

提出いただくものは、調査票と橋の位置を示す地図となります。

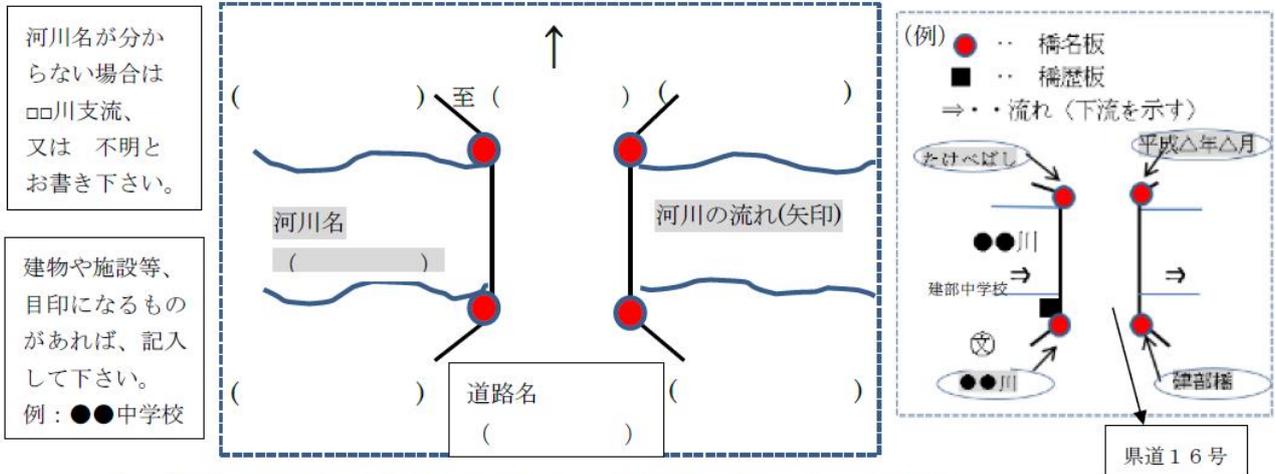
- ・ 橋1本に対して、調査票は1枚に記入していただくことになります。
- ・ 橋の位置を示す地図には、複数の橋をまとめて記入していただいても構いません。

調査期間は、2017年12月から2018年4月10日までとします。

冬の寒さが和らぐような日には、気楽に運動不足やストレス解消もかねて、暖かな陽ざしの中に飛び出して、楽しみながら調査をすすめてみましょう。いろいろな発見があるかもしれません。皆さまから提出される調査票で、何が集まってくるのか、何が見えてくるのかを考えますと、未知数の夢の広がりを感じ、今回の調査は、皆さんの興味の広がりネットワークが結果に大きく反映するのではないかと数々の期待をしています。よろしく願いいたします。

★ 橋名板・橋歴板がある場合、

* 橋名板 (橋名 (漢字)、橋名 (ひらがな)、河川名、竣工年月) を探して、下の枠内に右図の例を参考にして、とりつけられている場所と文字を記入してください。



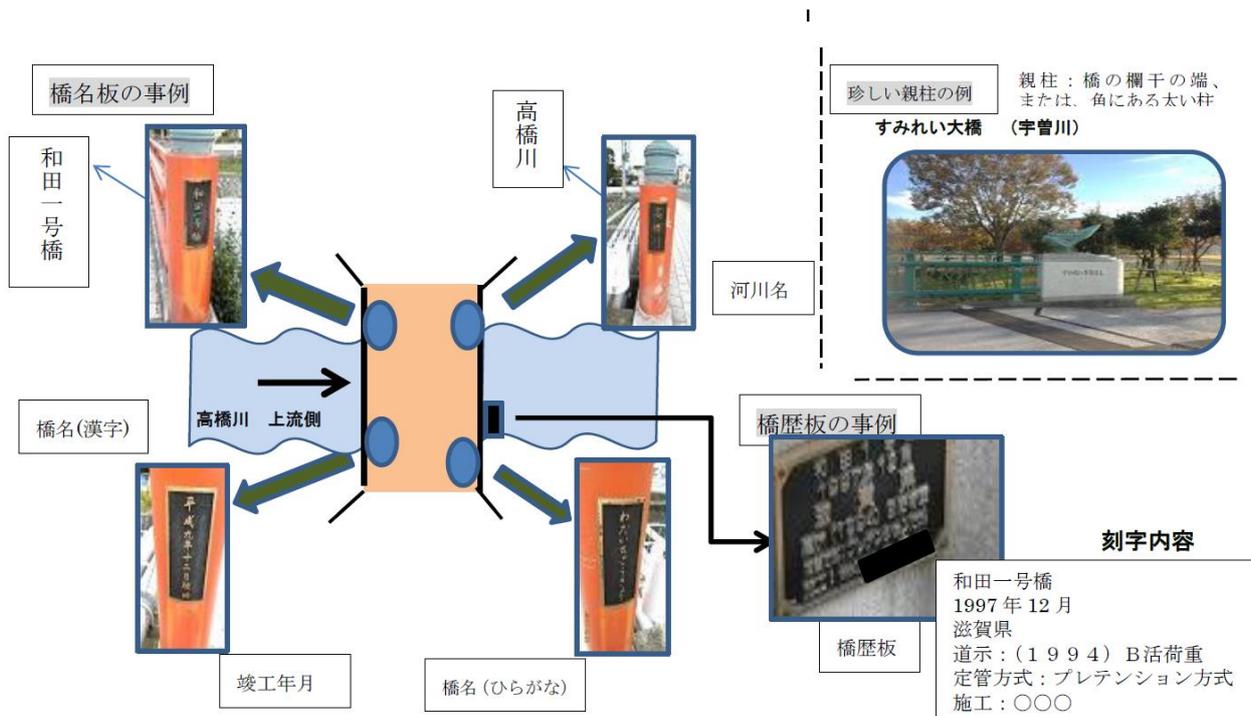
* 橋歴板の金属板の刻字内容が見えたら、下の枠の中に記入してください。

(橋名) _____
 (竣工年月) _____
 ●●●●●●●●以下不要
 ●●●●●●●●

文字が小さく見づらい場所につけられている場合が多いので、
文字を読むには危険な場合もあります。

(無理をせずに、十分ご注意ください)
 (注) 橋名、竣工年月だけで結構です。

* 橋名板などの設置場所や欄干・親柱の特徴 (あれば)



Appendix 3 【橋の位置を示す地図】

記入事項

*橋の記号

*流れの方向

*橋番号：#

(調査票4-①の番号へも同じ番号を記してください)

*河川の名前：●●川または●●川支流

*道路の名前：○○号線

調査月日： 月 日

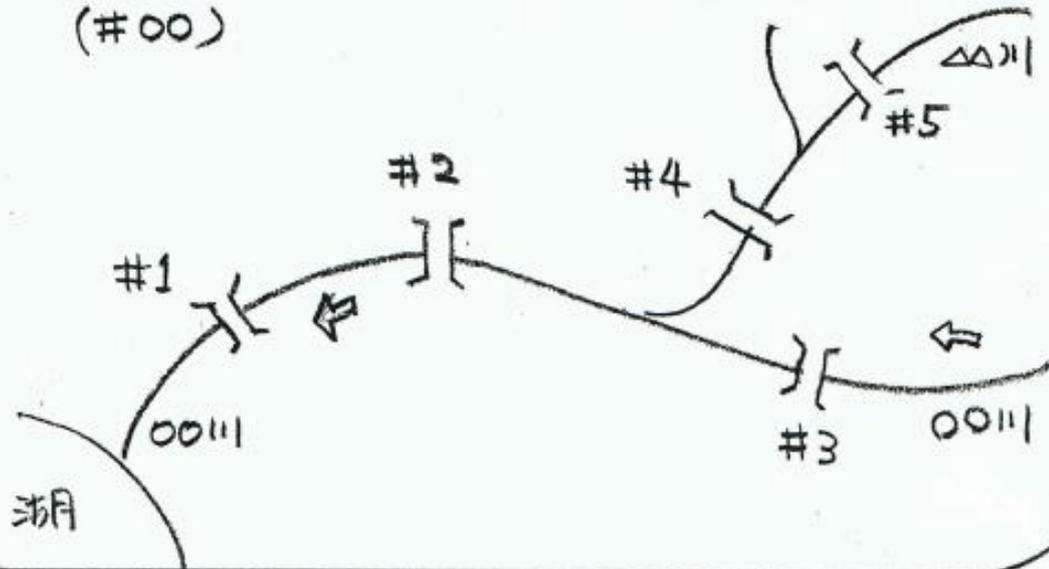
調査月日： 月 日

【地図記入例】

川に沿って調査をする場合の描き方

 : 橋の記号
  : 流れの方向
 * 河川の名前 $\Delta\Delta$ 川

* 調査した橋番号をつける (調査票3-①の番号へも同じ番号を記す)
(#00)



道をたどって調査をする場合の描き方

* 河川の名前 $\bigcirc\bigcirc$ 川
 * 道路の名前 国〇号、県〇号

